出生順位とパーソナリティの関連

13psm103 植田那月　13psm113 原田優里　13psm115 室井猛
指導教授：清水良三教授

1．問題・目的

性格とは、行動や思考の一定のパターンのこと（心理学辞典）であり、各種の性格検査や病前性格など、心理学の研究や実践のなかで一つの大きな文脈を持っている。性格に影響をもたらす要因としては様々なものがあげられており、家庭環境もその一つと考えられている(高橋，1976)。倉岡ら(2010)は、家族環境のなかでも出生順と対人関係の取り方に着目し、行動パターンにおける性格との関連を示している。そもそも、出生順から成るきょうだい関係とは、親子関係にみられる「たて」の関係と友人関係にみられる「よこ」の関係の中間にあり、前者から後者へ移行する際に役立つ「ななめ」の関係であるといわれている(塩田・大橋,1958 ただし磯崎,2004 より引用)。さらに早川ら(1983)は、幼少期から家族内で多種類の人間関係を体験していることは、成長後の社会への適応に有利に作用すると予想し、きょうだい関係は人格形成に大きな影響を与えていると述べている。以上のように、きょうだいの存在が性格に影響を及ぼす可能性が考えられることから、本研究では出生順に着目する。

またそのほかに、家庭環境のうち養育態度に着目した研究が行われている。それらの研究では、青年の自己評価や自己愛との関連および、きょうだいへの劣等感や敵対感情を抑圧することは心理的問題につながることが示唆されている（たとえば徳田，1987；小西ら，2003；弘田，2009）。これらのように養育態度と個人の心理との関連が示されていることから、性格と出生順位の検討に際し、養育態度の観点は無視できないと考える。

本研究では、出生順位が性格に与える影響および、出生順位が養育態度に与える影響を検討する。

2．方法

都内の私立大学に通う大学生 264 名に質問紙調査を行った。そのうち記入漏れ等を除く 203 名（男性：82 名、女性：121 名）を有効回答とした。平均年齢は 20.5 歳（SD：1.27）であった。

使用尺度は「日本語版 TCI125」(木島ら，1996)と「PBI 尺度」(井上ら，2006)を用いた。「日本語版 TCI125」は、気質と性格の 7 次元に基づく質問紙である。気質としては「新奇性追求」「損害回避」「報酬依存」「持続」の 4 因子から、性格としては「自己志向」「協調」「自己超越」の 3 因子から成っている。「PBI」尺度は、親の養育態度について訊ね、「情愛」「依存期待」「決定尊重」の 3 因子から成っている。フェイスシートでは、年齢、きょうだいの有無、きょうだい構成について質問した。

3．結果

出生順位、性別を要因とした分散分析を行ったところ、性格の全ての因子および養育態度に有意差はみられなかった。そのため、きょうだい構成のうち、長子及び末子に属する回答者と一人っ子に限定し、分析を行った。

その結果、「新奇性追求」「損害回避」「報酬依存」「自己超越」において、特定の属性に有意差がみられた。「新奇性追求」では、長男は長女に比べ優位に高いことが示された($p<.05$)。「損害回避」では、長男と長女および、長男と女性末子に優位な傾向がみられた($p<.10, p<.10$)。「報酬依存」では、長男、男性末子、男性一人っ子、女性末子に比べ長女が優位に高いことが示された($p<.05$)。また、「自己超越」においては、長女が長男に比べ優位に高いことが示唆された($p<.05$)。

4．考察

分析の結果から、性別と出生順による性格への影響が部分的ではあるが認められたと言える。その一方で、出生順による PBI 尺度の養育態度への影響は認められなかった。

出生順による性格への影響が認められた因子は、「新奇性追求」「損害回避」「報酬依存」「自己超越」であった。この中で、「新奇性追求」、「損害回避」、「報酬依存」の 3 因子は気質次元に該当しており、「自己超越」は性格次

元に分類されている。気質次元は、脳内物質の分泌との関連が示されており(国里ら, 2007)、出生順別のパーソナリティの違いは器質的な脳の働きの差異である可能性が考えらえる。また「男性：長子」と「女性：長子」の間には、これらの3因子において漏れなく有意な差、有意な傾向が認められた。これから、出生順によるパーソナリティへの影響は、気質次元への影響が特に大きく、またそれは「男性：長子」と「女性：長子」を比べたときに顕著であると言える。

TCIによるパーソナリティにて、差が見られた各因子について考察をする。「新奇性追求」においては、「女性：長子」が「男性：長子」に比べ有意に低いという結果であった。また、その他の本研究のデータと比べても、「女性：長子」の「新奇性追求」の値は低いものであると言え、「女性：長子」は慎重であり、新しいものを求めない傾向にあると言える。

また「損害回避」においては、「男性：長子」と「女性：長子」及び「女性：末子」の間に有意差が認められ、「男性：長子」に比べ女性できょうだいのいる人の方が危険や不確実を避ける傾向にあることが示唆された。さらに、「報酬依存」では「女性：長子」と「男性：長子」及び「男性：末子」、「女性：末子」の間に有意な差が認められ、とりわけ「女性：長子」と「男性：一人っ子」との間に大きな差が見られた。これから、「女性：長子」は他の出生順よりも人との結びつきが強く、対人希求が強いことが予想される。

加えて、「男性：長子」と「女性：長子」の間には性格次元に該当する「自己超越」においても有意な差が認められている。性格次元は、自己概念についての洞察学習によって発達するとされ、「自己超越」は全てのものとの一体化を示し、全てのものは全体の部分であるという統一意識が含まれると定義されている(国里ら, 2007)。これから、「女性：長子」は唯物主義的、自我の防衛が強い傾向にある可能性が示唆された。

以上のことから、青年期において出生順におけるパーソナリティ、特に気質次元における有意差が多く認められることが示された。また、この差は「男性：長子」と「女性：長子」の間に多く認められることから、本研究で認められた差は出生順だけでなく性差による影響も受けていることが示唆された。これは、文化的な背景の影響を受ける女性性、男性性との関連が予想され、特に長子は「女らしさ」、「男らしさ」を強く求められたことから、両者間の差につながったことが予想される。

5．今後の課題

本研究では、気質次元において多くの有意差が見られたが、この差が純粋な気質によるものか、性格の差異による影響の結果、気質に差異が認められたのかは分からない。そのため、より多くのサンプルを縦断的に観測し、さらに質問紙だけでなく脳内分泌物質の観測により、気質次元の傾向をより器質的に検討することで、パーソナリティの生理的な側面をより明らかにすることが可能になると考えられる。

また本研究では検討できなかったが、出生順に加えてきょうだいの性別や、きょうだいとの年齢の差などによってその質は異なることが予想される。加えて、本研究では中間子のサンプルが著しく少なく、中間子を含めた検討が出来なかった。今後の研究では、サンプルサイズを増やし、各群間のサンプルサイズの偏りをある程度無くし、様々な分析、検討を行うことが必要である。

なお、本研究で出生順による養育態度への影響がみられなかったことについては、PBI 尺度における「情愛」「依存期待」「決定尊重」因子以外の要因があったことが考えられる。そのため今後は、養育態度を測る他の尺度を用い、出生順との関連について多面的に見ることが必要である。

6．主要参考文献

木島伸彦・斉藤令衣・竹内美香・吉野相英・大野裕・加藤元一郎・北村俊則(1998)　Cloninger の気質と性格の7次元モデルおよび日本語版 Temperament and Character Inventory(TCI)，精神科学診断，7(3)，379－399